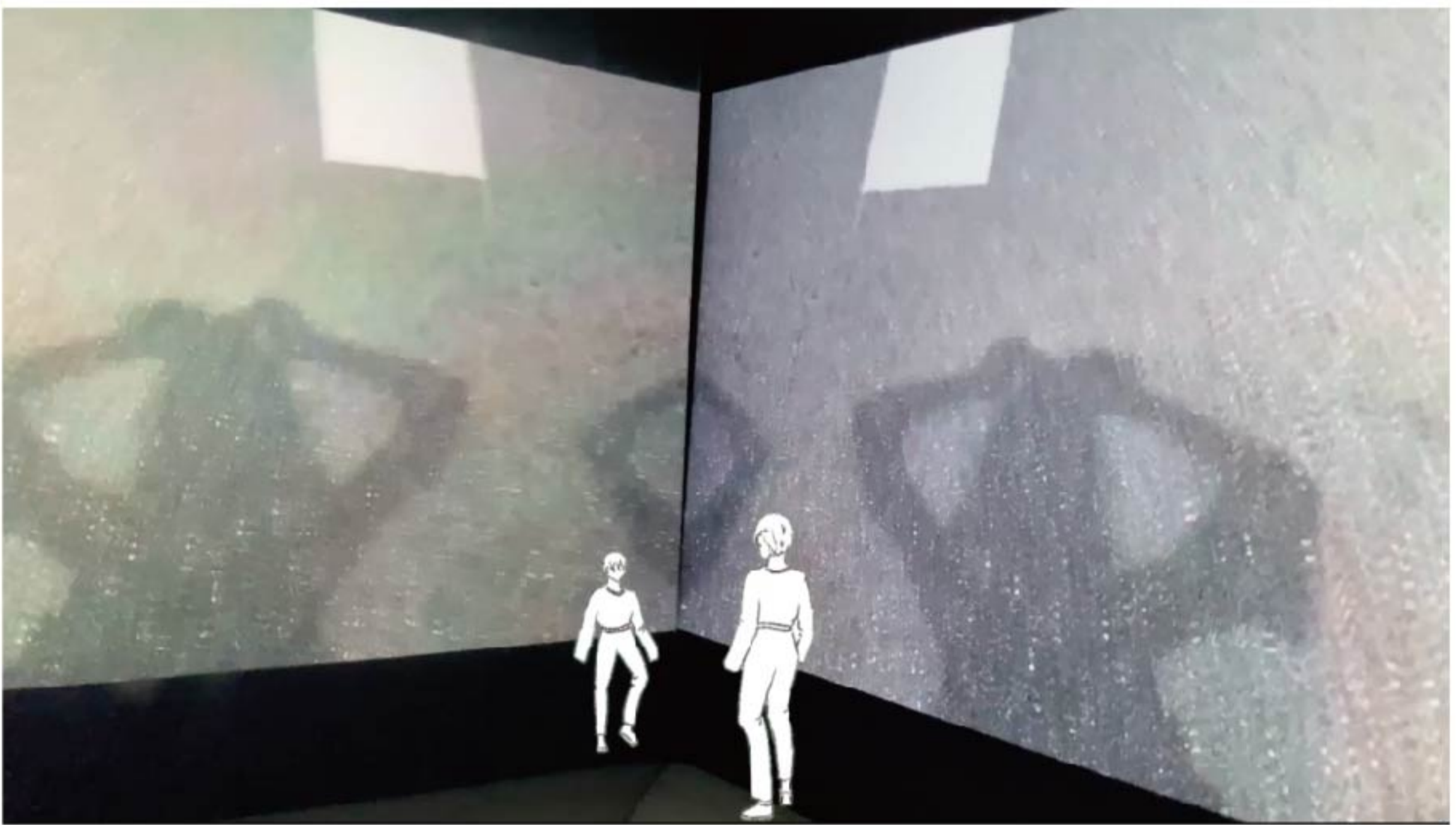


劉 丹妮
LIU Danni



覗き

スチレンボード、映像アニメーション



覗き

光と影と錯視をベースに背景セットを作り、2D アニメーションを加え、現実と非現実の隙間をテーマに映像作品を制作した。入学時、コロナ禍の影響が比較的大きかった時期だった。2月から5月にかけて、いつも生活していた環境が捻れ、自分自身も捻れ始めて、現実と非現実の隙間に生きてると感じた。その感覚を活かして、光と影と錯視を使って不規則な感情を表現している。このセットは逆遠近法を非現実的な場所の象徴として、主人公も人間のように見えるが人間ではないものとして表現している。マジックミラーは境界線のようなもので、空間を隔てる門であり、反対の景色や未知のものを見ることが出来る。神秘的で壊れやすく、壊れたらまた新たな風景を見ることが出来る。トリックアートは脳の指示で目を騙し、周りのすべてが非現実的だと感じさせるのも脳である。脳の処理が不完全さによる目の錯覚などを発生させる。この作品はその目の錯覚を活用している。実在する目を欺くものほど非現実的に感じさせると考える。一度体験しても視点が変わればまた何度も騙されてしまう。逆遠近法を使って現実と非現実の隙間の虚しさを表現しようと思ったのは、目の前に通り抜けられそうな道があり、どちらから進んでも反対側にたどり着けると思ったことがきっかけで、進めば進むほど奥に続いていく道は実は真逆で遠くには行けず、道に戻ることでまた目の前に現れる。作品は3つの部分に分かれており、一つは暗闇の中で思わず光に向かって前進する。もう一つはマジックミラーの後ろに迫る物事への好奇心と恐怖、そして最後は未知を探求したいという願望。未知の先は未知のまま、まだ未確定。この主人公はまだこの隙間にいて探検し続ける。そのつかみきれない感じを体験できたらと思う。